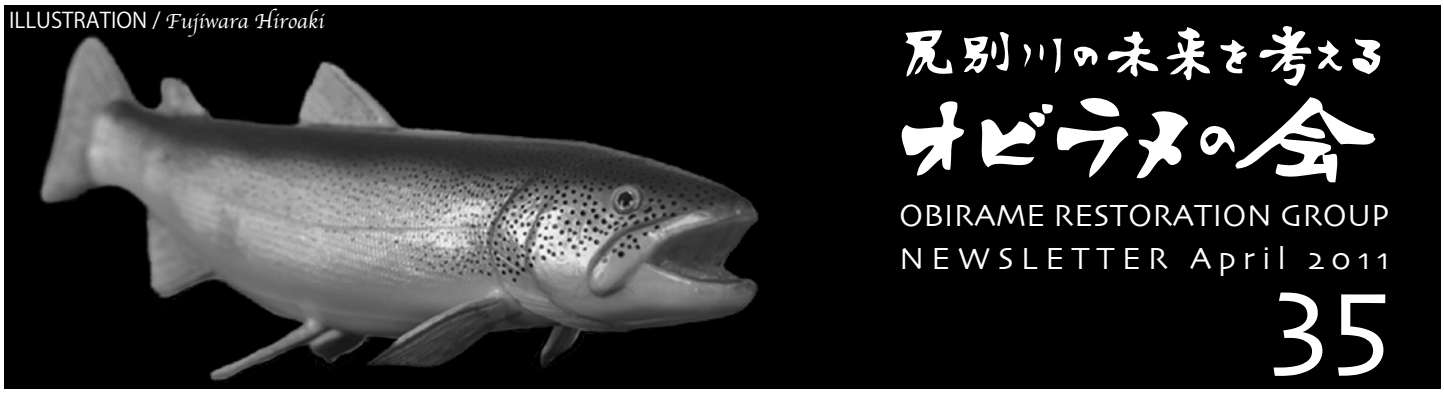

尻別川の未来を考える
オビラメの会
OBIRAME RESTORATION GROUP
NEWSLETTER April 2011
35

イトウ保護に向けて倶知安町と協働

福島町長「宝物を発見した思いです」

photo/Hirata Tsuyoshi

「保護に向けて協力したい」と語る福島世二・倶知安町長

倶知安風土館主催の町民向け講座「20年ぶりに遡上確認！　幻の魚イトウの尻別川での自然繁殖」が2011年2月5日、同館で開かれました。

開催協力の「オビラメの会」から、地方独立行政法人北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場の川村洋司会員が「絶滅危機種イトウの保護対策」と題して、またモニタリングチームリーダーの大光明(おおみや)宏武会員が「尻別川のイトウ自然繁殖」と題して、これまでの経緯や観察結果を詳しく報告しました。

講演会には福島世二・倶知安町長も出席。閉会の挨拶に立ち、「イトウの名前は知っていましたが、実はこれまであまり関心がなかったのです。でもきょう、ここに来て講師の方たちのお話を聞いて、改めて自然の宝物を発見したような思いがしています。保護に向けて、出来るだけお手伝いしていきたいと思います」と語りました。

講演会の模様は報道番組「幻の魚イトウ　自然産卵を確認」としてHTBテレビ「MIKIOジャーナル」などで放映され、全編をインターネットでみることができます。「オビラメの会」ホームページからどうぞ。

「繁殖期のイトウ釣り自粛を！」フィッシングアクセスに啓発看板を設置

株式会社菅原組（蘭越町）が地域貢献活動

尻別川流域のまち、蘭越町の株式会社菅原組(菅原俊宏社長)はこのほど、地域の自然環境保護への貢献活動の一環として、「オビラメの会」と協働で尻別川のイトウ保護を訴える啓発看板3点を作成。河川管理者の許諾を得て、尻別川のほとりに設置することになりました。

看板は幅約90cm、高さ約60cm。リアルで迫力あるイラストは、「オビラメの会」の藤原弘昭会員が手がけました。

2011年度会員の更新手続き中です。
どうぞお早めの年会費納入を！ 口座番号は最終面に

尻別イトウ・モニタリング報告2011

大光明宏武　オビラメの会モニタリングチーム

「オビラメの会」はこれまで4度にわたって、尻別川産イトウを親魚とする人工孵化稚魚を、尻別川水系倶登山川の流域に放流してきました。放流後に魚たちがどうなっていくか、「オビラメの会」は定期的に追跡調査を続けています。同時に、10年5月にイトウの自然遡上と産卵が確認された尻別川支流で、経過を詳しく観察しています。これまでの結果をご報告します。

「2007年生まれ」はすべて分散

「オビラメの会」が放流したイトウには全て標識をつけて誕生年と放流日を区別できるようにしていますが、放流場所で電気漁具を用いて生け捕りを試みたところ、09年8月以降、07年生まれのイトウは1匹も見つからなくなっています。イトウは成長するにつれて下流域に分散していく習性があり、生存している07年級のイトウたちはほとんど放流河川から流下していったと考えられます。

オビラメの会再導入実績(倶登山川)

人工孵化年	放流時期	放流数
2004年	2004年9月	1800
2004年	2005年6月	1700
2007年	2007年9月	2800
2007年	2008年6月	1000

いっぽう04年生まれのイトウは、10年11月に、春放流・秋放流の1個体ずつが放流河川内で再捕獲されました。この2匹の体長は53cm(秋放流魚)と47cm(春放流魚)でした。6歳のイトウにしてはかなり小型です。ここは幅2mほどの小河川ですから、感覚的に20～30cm程度までなら、生残率を高めるのに有効な河川だと考えますが、それ以降は成長するのに十分なキャパシティがある川とは言えないと思います。

一方、放流後早い段階で流下分散をした魚の追跡は殆ど行えていませんが、09年6月に体長約50cmの放流イトウが尻別川本流で釣られています。

04年級は、10年には雌が繁殖可能年齢に差しかかりましたが、放流河川ではまだ遡上および産卵床は確認していません。尻別川の個体群は、他水系の個体群に比べて初成熟年齢が遅いのかも知れません。

イトウにとって厳しい繁殖環境

次に、10年5月にイトウの自然遡上と産卵が確認された支流での観察結果をご報告します。

この川は上流部の大部分が岩がちな急流で、イトウ繁殖に適しているというより、むしろ「イワナの川」のようにみえます。流速・水深・礫(川砂利)サイズのいずれについても、イトウ繁殖にはかなり厳しい条件で、この川の流れの中で、イトウ親魚たちは最下流のごく短い区間に集中して産卵床を作っていました。他に適した場所が見つからず、「仕方なくそこに産んだ」という印象を私は受けています。

親魚の行動にもそれは現れていて、空知川など他の繁殖地でなら、産卵床を掘り始めて埋め戻すまで3～4時間で済むところ、尻別では8時間もかかっています。同じ場所を20回も行ったり来たりしながら、何十回も試し掘りする、といった行動を観察しました。やはり「仕方なく」そこを選んでいたように思われます。

当該産卵支流は、親魚の繁殖にかかるコストを考えると、他の捕食者に狙われる危険性増大の他、魚体の体力消耗面で、リスクの高い繁殖地と言えると思います。

また、受精後の発眼期に各産卵床内の卵を調べたところ、死卵や未授精卵が目立ちました。当該河川の環境の悪条件ゆえに産卵までにかなりの時間を費やしたことにより、放卵放精時の精子や卵の状態が悪化してしまった可能性が考えられます。このことが受精率を低下させた要因の一つとして考えられます。

孵化したベビーは成長良好

孵化・浮上後の昨年8月にタモ網を使って、また11月には電気漁具を用いて、稚魚の捕獲調査を試みました。それぞれ3個体、9個体を確認しました。

第1の注目点は、稚魚の成長の良さです。8月の平均体長は3.5cm、11月は7.0cmで、たとえば空知川での同時期の稚魚の数値と比べると、明らかに大型でした。繁殖親魚の体サイズは100cm前後ありました。親魚の体サイズに比例して、卵サイズが大径であったため、稚魚の浮上直後の体サイズも大きかったことに加えて、この成長の速さは、尻別川個体群の特徴かも知れません。あるいは、今回は遡上親魚がいずれも巨大な個体で、もともと卵径が大きかった結果だと思います。

第2の注目点は、この川は3面護岸張りにもかかわらず、岸際の一部に植生が発達して、イトウ稚魚が定位できる環境がわずかながら存在していたということです。

繁殖環境の復元と創出を！

こうした観察結果から、2つご提案したいと思います。

1つは、イトウ親魚たちの繁殖コストを低減させるために、川の勾配をいくばくか緩和するような工夫です。そうすれば今よりも流速が落ち、より小さなサイズの礫が河床にとどまって、産卵可能な範囲をもっと広げることができると考えます。

2つめは、稚魚生育環境の創出です。現状でも、水際の植生が稚魚の居場所に役立っています。川岸をもっと複雑にして、稚魚の生残率を高める工夫が必要です。

尻別川は人の住環境にとても近く、治水・利水上の観点を忘れることはできませんが、安全性に配慮したうえで、せっかく再発見されたこのイトウ自然繁殖地を保全復元していく努力をできるだけ手厚く重ねていくべきだと思います。

尻別イトウ保護の現状と課題

PHOTOS / Hirata Tsuyoshi

川村洋司　北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場、オビラメの会

釣り人さんたちの間では、尻別川のイトウは他の川のイトウより明らかにデカい、とよく話されていますが、データからもそのことがうかがえます。「オビラメの会」が2010年初夏まで長年にわたって飼育してきたイトウたちの成長曲線を他の川のイトウと比べてみると、尻別イトウは幼魚の時期から顕著に成長が速いのです。

サイズの割に若いので、他の川のイトウなら繁殖適齢期、と思えるサイズの魚も、尻別川では未成熟な場合が多々あります。このことだけをとっても、尻別川のイトウは何か特別で、大きな魅力を持った存在だと言えるでしょう。

ところが昭和40年ごろから、尻別川のイトウは急に減り始めます。われわれは1990年代後半に全流域の踏査しましたが、繁殖の痕跡はわずかしか発見できませんでした。現在では自然再生産はほとんど行なわれていないと考えられています。

絶滅回避のための窮余の策

このまま放置しておいては早晩絶滅は避けられません。そこで「オビラメの会」はオビラメ復活30年計画(2001年)を立案しました。①尻別川の自然環境を復元し、②尻別イトウの遺伝的固有性に注意を払いながら人工孵化放流で資源を増やし、③イトウ釣りのルールを設けて適切な保護管理を実現しよう、という計画です。すでに最初の10年が経過し、今は第2期に差しかかっています。

①では、稚魚を放流している倶登山川などで地域行政機関と協働で魚道整備を着実に進めていますし、②も同じ倶登山川でこれまで5000匹ほどを放流し、大光明さんを中心に追跡調査が続けられています。

とはいえ、この人工孵化放流は大きなリスクがあり、できれば使いたくない手法なのです。なぜかと言えばまず、少数の親魚に頼らざるを得ないので遺伝的多様性の確保が難しい。また、たとえ短期間でも、人工的に飼育した魚が放流後の自然環境中でうまく適応できない例は、サクラマスなどでも報告されています。さらに、放流魚が未知の病原を自然界にもたらしてしまう危険もあります。「オビラメの会」では議論と研究の末、絶滅回避のために他に頼るべき方法がないと判断して、やむを得ず採用したという経緯があります。

自然産卵がどれほど重要か

尻別川では幸運なことに昨年5月、およそ20年ぶりに尻別川流域でイトウの天然産卵が確認されました。こうした環境を最優先で保護すべき、ということは、われわれが準拠している国際自然保護連合の再導入ガイドラインにも明記されています。現場の産卵環境は良好とはいえず、親魚の数も産卵数もとてもわずかですが、これをどうやって上手に守り、さらに増やしていくかが、これからの最大の課題です。

希少な生物を守るのなら、何か強力な保護法があるのでは、と考える方もおられるでしょう。いくつかを見てみましょう。

北海道には「希少野生動植物の保護に関する条例」があります。しかし、産卵期・産卵場所でだけイトウを保護する、といった小回りがききません。一年中、生息地全体(流域全体)で魚釣りや工事が規制されることになりかねず、社会合意を得られないでしょう。天然記念物を指定して守る仕組みの「文化財保護法」も、同様の使いづらさがあります。

尻別イトウは流域の宝物

漁業関連法はどうでしょう。例えば「北海道内水面漁業調整規則」を適用して、繁殖期・繁殖地でのイトウ採捕を禁じるのです。ヤマベ禁猟措置などはこのやり方ですが、問題は行政がイトウを水産資源と認めていないこと。イトウ保護への適用は難しいのが現状です。

残された道は、われわれ自身が流域の町村や住民の方、さらに釣り人の方たちといっしょに、「繁殖期のイトウは捕らないで」とお願いすることです。尻別イトウが自力で再生産していることについての情報をできるだけ多くの人たちと共有して、「イトウは尻別川流域の宝物」という意識を育んでいけたらと思うのです。またそうやって地域ぐるみで保護体制を作っていくしか、方法はないと思います。

これからは「地方の時代」と言われています。強制的な法律にむやみに頼ることなく、「住民のみなさんといっしょに自分たちの総意で守る」やり方のほうが、「流域の宝物＝イトウ」保護には、はるかにふさわしいのではないでしょうか。いくら法律の規制力が強いといっても、違反覚悟の密漁は防げず、地域の合意なき法律は地域住民の反発を招いて、絵に描いた餅になってしまうからです。

イトウ保護の決定打はありません。ぜひみなさんの協力をお願いします。

2011年3月28日、オビラメの会ミニシンポジウム in 札幌「20年ぶりに遡上確認！　幻の魚イトウの尻別川での自然繁殖」(札幌市男女共同参画センター大研修室)での話題提供から。

イトウ親魚５匹を尻別川にお返ししました

「オビラメの会」は2010年6月26日、これまで長く飼育してきたイトウ親魚5個体（チビ、ノリカ、チョースケ、キンチャン、ササキサン）を、生まれ故郷の尻別川にお返ししました。いずれも「オビラメ復活30年計画」の最初の10年を支えてきた功労者たち。放流式には会員ら約20人が集結し、それぞれ思い出を脳裏によみがえらせながら、感謝を込めてイトウたちを静かに川に放ちました。今後は、彼らから人工孵化させた第2世代のイトウたちを増殖し、再導入につなげていく計画です。

PHOTOS / Hirata Tsuyoshi

倶登山川の魚道工事がひとまず完了。ひきつづき検証へ

北海道後志総合振興局農村振興課が2006年度から進めてきた倶登山川流域計5基の落差工(農業ダム)への魚道新設工事が2011年3月、最後の「4号落差工魚道」の完工でひとまず終了しました。

倶登山川では、「オビラメの会」が2004年秋からイトウ再導入実験を開始。5基の落差工がイトウを含む水生生物の自由な行き来を妨げていることから、同振興局に対策を要望し、魚道新設工事が始まりました。「オビラメの会」は同振興局が設けた検討会に委員として加わり、デザイン案を提供するなど、協働方式で工事が進んできました。

魚道は魚たちが無理なく上り下りできるかが肝心。「オビラメの会」は完成した各魚道で独自にモニタリング(追跡調査)を行ない、効果検証を試みています。また同振興局も2011年度に効果検証を実施する予定です。

イトウ保護管理の先進地・南富良野町で保護フォーラム開催

第9回北海道イトウ保護フォーラム「イトウとくらす条例の町　南富良野から」が11月6日、「南富良野町保健福祉センターみなくる」で開催されました。ソラプチ・イトウの会主催、イトウ保護連絡協議会共催。

全国初の「イトウ保護管理条例」を持つ同町は、町内を流れる空知川(石狩川支流)に生息する野生イトウを対象に、まちぐるみで保護管理を実践。条例制定1周年を記念して開かれたこのフォーラムでは、繁殖期のイトウ釣り自粛を定めた同条例が、早くも一定の効果を上げつつあることが報告されました。

翌7日は「かなやま湖保養センター」でイトウ保護連絡協議会の総会が開かれ、各加盟団体が近況報告。続いて、「ソラプチ・イトウの会」会員のみなさんのご案内で、空知川のイトウ繁殖環境を観察に出かけました。

ニセコ町を尻別イトウ保護の拠点に。コラボに向けて協議スタート

オビラメ勉強会「尻別イトウをどう守る？　ニセコ町を舞台に」が2010年10月31日、ニセコ町のオビラメの会事務局で開かれました。ニセコ町役場から「緑の分権改革」担当職員の竹内聖さん、また後志総合振興局小樽建設管理部真狩出張所の石井正樹さんを迎え、主にニセコ町内の自然河川を舞台にしたイトウ再導入拠点の創出などについて、議論を交わしました。

自然河川を利用しての魚類飼育施設の整備には、複雑な法規制をクリアする必要がありますが、地元自治体などとの協働によって、実現可能性はぐっと高まります。ニセコ町のイトウ保護管理に寄せる関心は高く、竹内さんは「オビラメの会のプランをよく聞きながら、積極的に協力できるよう検討していきたい」と述べてくれました。引き続き緊密な協議を続けていく方針です。

当会のイトウ保護活動に助成金

「オビラメの会」のイトウ保護活動計画に対して、「日野自動車グリーンファンド」と「セブン-イレブンみどりの基金」からそれぞれ助成金が贈られることが決定しました。

吉岡俊彦・オビラメの会事務局長の話

日野自動車グリーンファンドさん、セブン-イレブンみどりの基金さんには、これまでも当会のイトウ保護活動に多額の助成をいただいており、今回重ねてご支援いただけることになったのは、少しずつですが、尻別イトウの復元という目標にわれわれが近づいていると認めてくださったからだと思います。「オビラメ復活30年計画」の達成までまだ道のりは長く、活動継続のためにこの援助はとてもありがたく、深くお礼申し上げます。

photo/Hirata Tsuyoshi

北海道日野自動車の任田慧社長(左)から、日野自動車グリーンファンドの助成金目録を受け取った藤原弘昭オビラメの会会員。2010年12月7日、札幌市東区の同社内で開かれた贈呈式で。

セブン-イレブンみどりの基金

一般財団法人セブン-イレブン記念財団

セブン-イレブン・ジャパン創立20周年記念事業として、加盟店とセブン-イレブン本部が一体となって環境をテーマに社会貢献活動に取り組むことを目的として、1993年(平成5年)に設立されました。店頭でお客様からお預かりした募金と本部からの寄付金を基に、加盟店と本部が相互協力のもと環境市民団体への支援活動や自然環境保護・保全、地域環境美化活動、広報活動などを行なっています。(同財団ホームページから)

日野自動車グリーンファンド

財団法人日野自動車グリーンファンド(HGF)は、「社会環境との調和」を基本理念として、平成3年に日野自動車株式会社の出資により設立されました。「地球規模で考え、行動は足元から」をモットーに、様々な環境緑化、自然保護に関わる事業の実践、助成を行なっています。(同財団ホームページから)

倶知安風土館講座 「世界のイトウ、北海道のイトウ、尻別川のイトウ」

【講師】川村洋司さん(道立総合研究機構 さけます・内水面水産試験場)

2011年4月24日(日曜)15時から倶知安風土館で開催。詳しくは「オビラメの会」ホームページをどうぞ。

「オビラメの会」は新入会を歓迎します

「尻別川の未来を考えるオビラメの会」は、会費と寄付金などで運営される市民団体です。みなさまのご支援・ご協力をよろしくお願い申し上げます。年会費は2000円です。郵便局の振り込み用紙に住所、氏名、電話番号を明記のうえ、入会希望と書き添えて、右の郵便口座にお振り込み下さい(手数料はご負担願います)。会員期間はお振り込みいただいた日から年度末(5月)までです。おおむねひと月以内にニューズレターをお届けします。

■年会費2,000円
■郵便振替
02720-9-11016
■加入者名
「オビラメの会」

標識オビラメ見つけたら
☎0136-44-2472
オビラメ事務局マデ

オビラメの会ニューズレター 第35号(2011年4月発行)
OBIRAME Newsletter No.35 April 2011
■発　　行■　尻別川の未来を考えるオビラメの会
■編　　集■　平田剛士
■印　　刷■　(株)須田製版　(北海道滝川市栄町3-5-16)
■発　　送■　吉岡俊彦
■郵便振替■　02720-9-11016　加入者名「オビラメの会」

■オビラメの会事務局■
北海道虻田郡ニセコ町富士見65「まぐろ屋十割」内
吉岡俊彦方　〒048-1501　TEL/FAX 0136-44-2472

copyright 2001-2011 Obirame Restoration Group

http://obirame.fan.coocan.jp/

水と空気、みどりの大自然
ニセコが好きだ
楽しんだあとは川を語ろう

まぐろ屋十割

ニセコ町富士見65　TEL/FAX 0136-44-2472
Email / itou110@sa2.gyao.ne.jp